FRESH PIANIST INTERVIEW

ピアニストへの10の質問㊱

三宅麻美

Mami Miyake

ピアノは"私の人生"いのちを吹き込む場所

これからが期待されるピアニストに、直球、変化球を織りまぜて一〇の質問に答えていただく、このコーナー。今回はベルリン芸術大学、同大学院、イモラ国際ピアノアカデミーを卒業され、第四八回ヴィオッティ国際コンクール審査員特別賞をはじめ、数々の国際コンクールで上位入賞されて、内外でご活躍中の三宅麻美さんにご登場いただきました。

小学4年生のとき初めて買ってもらったグランドピアノと

Q1 ピアノとの初めての出合いは?

五歳のとき、祖父にヤマハのアップライトピアノをプレゼントされ、幼稚園の年長クラスに上がった四月からレッスンを始めました。私自身はよく覚えていないんですが、母に聞いたところでは九月の発表会で《エリーゼのために》を、十二月には《小犬のワルツ》を弾いたそうです。祖父はクラシック、特にピアノが大好きで、本当は母に習わせたかったのでしょうが、それが叶わず、私に夢を託したのだと思います。

Q2 子供の頃のエピソードを教えてください。

小学生の頃習っていた先生がとても厳しく、レッスンで指導されたことを一週間でこなすのに必死でした。学校から帰宅してすぐピアノに向かい、夕飯をはさんで十時近くまでやっていましたから、毎日五時間は弾いていましたね。そんな私を母が見かねて、「厳しい先生だけれど大丈夫?」と気遣ってくれたこともあるのですが、私は「自分のためになることだから、続ける!」と答えたそうです。自分では全然覚えていないのですが……(笑)。

その先生のご指導のおかげで、六年生のとき学生音楽コンクールで優勝して、東京や長野で受賞者演奏会に出演したこと、またNHKテレビの「音楽の広場」という番組で、司会の芥川也寸志先生と連弾したり、黒柳徹子さんと共演したのも楽しい思い出として忘れられません。

Q3　ピアニストになろうと決心したのはいつ、どんなきっかけから？

コンクールで優勝して以来、ピアニストになりたいという意識は常に私の中にありましたが、中学生のとき、反抗期とも重なり、自分の途が決められてしまうことに反発したこともあります。でも、高校二年になって進路を決める段階になり、やはりピアノを続けたいという自分の気持ちを再確認し、自分で芸大を受けようと決心しました。

Q4　留学先にベルリンを選んだのはなぜですか？　またその後イモラ国際ピアノアカデミーでも学ばれましたね？

小学校六年の夏休みに自由研究のテーマとしてモーツァルトを選び、本で見たドイツの風景に憧れたりしたことから、将来はドイツで勉強したいと漠然と考えていたんです。芸大に入学したご褒美として、両親がドイツとオーストリアへの旅行に出してくれ、そのとき触れたドイツの空気がとても気に入って、ドイツ語を勉強し始めました。直接的には、芸大で師事していた辛島輝治先生のご紹介でクラウス・ヘルヴィッヒ先生のレッスンを受け、「ドイツへ留学したい」とお話ししたところ、ベルリン芸術大学の受験を勧められたのがきっかけですね。

イモラ国際ピアノアカデミーは入学するのが難しく、年齢制限もあると聞いていたのですが、ベルリン芸術大学の大学院にいたとき、たまたま当時の私の年齢でも入学できるコースがあると聞き、「それなら受けに行ってみようかな」と思ったんです。ベルリン時代とはまた違う別の先生について、新たな自分の可能性を試してみたいとも考えていたところで、その後本科に移る試験にも合格することができましたので、イモラで学べて本当にラッキーでした。

留学中のベルリンの自宅で

イモラ国際ピアノアカデミーのロビーで父（右端）、母（左端）、事務のマリラさんと

ベルリン交響楽団とベルリン・フィルハーモニーホールでコンチェルト

Q5　数多くの国際コンクールで入賞を重ねられましたが、三宅さんにとってコンクールとはどんな場でしたか？

自分を試す場だったと思いますね。どれだけ精神的に集中できるかを試す……。コンクールは競争相手があってのものなんですが、最終的には周りに関係なく、自分の可能性を最大限に発揮することが大事なんです。勝ち残りたいという雑念を捨てて、音楽そのものに身を捧げる、没入する訓練ができたことは、現在の演奏活動にとても役立っていると思いますし、結果的にそうできたときに限って賞をいただくことができました。

Q6　師事された先生方からいただいた言葉で、今も常に思い返す言葉はありますか？

楽譜や先生から言われたことなどにとらわれてしまい、演奏が頭でっかちになって、音楽が流れなくなったとき、ペトルシャンスキー先生から「自分の音楽をしなさい」とアドバイスをいた

ベルリンで師事していたヘルヴィッヒ先生と

だき、ふっと解き放たれて弾くことができるようになったことがあります。

また、イモラの先生方に「音楽的であるだけでなく、芸術的であれ」と教えられたのも印象に残っています。かといって見せかけだけではいけないし、ただ強くあればいいというのでもない。舞台上で芸術家として存在しなくてはいけないということでしょうか。人間として根源的な部分で問われている言葉だと思います。

イモラでのリサイタルの後
ペトルシャンスキー先生と

Q7　今、興味を持って取り組んでいる作曲家やテーマは？

もともと好きだったドイツ・ロマン派の作品は生涯弾いていきたいと思いますが、ロシア出身のペトルシャンスキー先生の影響もあって、五年ほど前からショスタコーヴィチの音楽に非常に親しみを感じています。押圧された中での、声にならない心の叫びともいえる音楽に、弾いていてとても強いメッセージを感じます。先日もモスクワを訪ねたとき、彼の眠るお墓にお花を供えてきました。来年は生誕百年に当たるので、今からそれに向けていろいろ準備をしているところです。

Q8　これからピアニストを目指す人に、「これだけはぜひ！」と勧めたいことはありますか？

三つあります。第一に室内楽に沢山触れてほしいこと。ソロのピアノはすべてを担わなければいけないので、室内楽により息遣いやバランス、ソリスティックな要素をぜひ身につけていただきたいと思います。第二に、できれば語学を早く習得して、留学してほしいですね。周りの環境に左右されず、一人になって自分には何ができるのか、なぜピアノを弾くのかといったことを考える時間を持つのは、とても有益だと思います。第三に、これは言うまでもないことですが、生の演奏にできるだけ多く触れてください。

Q9　三宅さんにとって一言でいうと、「ピアノ」とは？

今だから言えるんですが、やはりピアノは〝私の人生〟ですね。自分のいのちを吹き込む場所であり、喜びや悲しみを感じていく場所です。ピアノは〝物〟なんですが、なぜか私にとっては〝場所〟なんです。

Q10　最後に、今後の活動予定を教えてください。

五月に韓国で、韓国人ヴァイオリニストの方とデュオを行います。六月には静岡で弦楽トリオ。十月には洗足学園のマスターズコンサートに、ソロリサイタルで出演します。十一月にも室内楽の演奏会を企画中です。来年二〇〇六年はショスタコーヴィチの生誕百年なので、彼の作品《24のプレリュードとフーガ》全曲と室内楽を組み合わせた三回シリーズを企画しています。

王子ホールでのデビューリサイタル

PROFILE

東京芸術大学、ベルリン芸術大学、同大学院、イモラ国際ピアノアカデミー卒業。第36回全日本学生音楽コンクール小学校の部全国大会にて第1位。第48回ヴィオッティ国際コンクール審査員特別賞のほか、ガンドルフィ国際ピアノコンクール、堺国際ピアノコンクール、フィナーレリグレ国際音楽コンクール、TIM国際音楽コンクールに上位入賞。これまでにベルリン交響楽団、ベルリン芸大オーケストラ、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、大阪チェンバーオーケストラとの協演、音楽祭への出演、ラジオ録音など日本をはじめ、ドイツ、イタリア、フランスにて活発な活動を行う。2000年末に帰国後、王子ホールにおけるデビューソロリサイタルで好評を博す。その他、奏楽堂デビューコンサートシリーズ、蓼科音楽祭への出演等、ソリスト及び室内楽奏者として多岐にわたる演奏活動を行っている。これまで、小笠原二郎、助川陽子、辛島輝治、クラウス・ヘルヴィッヒ、ボリス・ペトルシャンスキーの各氏に師事。洗足学園音楽大学、聖徳大学講師。